

● 高澤良一 第五句集 鳩信

● 炎帝

愛宕神社千日詣

ほほづきの鉢提げ愛宕大権現

ほほづき縁日笛ひやらひやらとひやらひやらと

大茅の輪雨具携え潜りけり

梅檀の葉のこまごまと梅雨に入る

鎌倉近代美術館

モガ・モボ展一渡り見てソーダ水

水馬雨に追ひ立てられにけり

妙本寺

擬宝珠の花にはじまるお題目

お出ましの守宮と暫しにらめっこ

落梅を一つ處に庭そうじ

夏掛のひやっとせるをあてがひぬ

伊豆へ避暑今は山中今は浜

手にとりし団扇ことしもこの図柄

天牛の朝飯前の力かな

搔き鳴らし我が家自家製氷水

腹の上団扇はたはたさせをりぬ

口癖のえらいえらいの夏始まる

夏掛して妻と思ひ出話など

古団扇扇ぎて去年の手術のこと

かかりつけ心臓外科の冷房利く

天然の涼風窓より浅草線

内職洋裁にて戦後を乗り切りし母曰く

黄泉にては閻魔の禪の文詰めん

汗っかき大漢にして大ジヨッキ

梅雨どきの眼ごろごろ使ひ過ぎ

汗くさき肌着ステテコシャツの山

梅雨鴉けふは出ばって近所の樹

はんちくな齡を取るまじ豆の飯

夏迎ふ駝鳥に片減りしない脚

あじさゐの毬に見事に乗りし色

時代の眼涼しく使ふ雄之介俳優伊藤雄之介逝く

菖蒲湯の菖蒲に術後の身を寄せぬ

アメリカンチェリー一粒底光り

普段着の海月の単衣よかりけり

エッセイのとば口に佇つ夜の秋

大暑の頭巡らすよいやさよいやさのさ

漢名は目赫爛れし夕空\*のうぜんに漢名ありもつかくに

のうぜんの似たり寄ったり花なだれ

のうぜんは脳破る花そを嗅ぐ貝原益軒「花譜」

祭の子苺遊びの町内湯

挫折にもいろいろありてのうぜん花

三伏の我が身一つを持って余す

身空てふ言葉も死語に団扇風

手を膝に金魚屋親爺目を配る

足のつぼ崑崙揉みてより昼寝

怪鳥を出して見せうぞ雲の峰

天日干し鰹を吹けり時津風

梅雨雀何か追い詰めたる羽音

水ばかり掬ひて金魚何時掬ふ

射的屋の手持ち無沙汰も夏祭

夾竹桃ブツダガヤなる聖地あり

とりついたりとりつかれたり葛の蔓

漢名の音の締りのよくて紫微おん

からす瓜真白き花の怯え咲き

何するにも大勢は佳き豆の飯  
そつとして置いてくれよとだんご虫  
いい加減降って止む雨花南瓜  
手術して一年経つかビール注ぐ  
夜顔や老人ばかり殖ゆる世に  
ここのごころご無沙汰残暑見舞出す  
青くわりん既に一徹者の貌  
蜻蛉の面白がりぬ穂先の揺れ  
沼辺より翔ちて蜻蛉の飛行艇  
家康公御廟きささげ青葉日光して  
滝落ちてアオダモの木に轟けり  
別名を鳥肌立の滝となん  
日光山一巡りして蜜豆  
夏葎埃立たせて雨の来る  
縦あふぎはた横あふぎ団扇風  
三尺寝濁世に用はなかりけり  
隣席の扇の風にあやかりぬ  
立秋と云はれて空の海のいろ  
わが持論一步譲りて団扇風  
気骨あるその歩きぶり羽抜鳥  
すいっちょと云ひて足音しのばせゆく  
結局は一日蝉を聞く羽目に  
うだうだと頭でっかち蝉啼けり  
盆の入電車幾分空いてをり  
炎昼をへたばりをると誰が云ひし  
雷公の所持品古ぼけ大太鼓  
捕虫網持ってほつつき歩きけり

噴水遠く望メバ鯨魚ノ潮吹クカト

旧季題ラムネに明治の活気あり

うつくつと蓮の奥より誰がこゑす

蓮葉の大きなやつがはたと昏れ

蓮弁のグラデーションを愉しめり

蓮田べり亀の子ぷかぷかやつてをり

寝返れば傷口ひくと夜の秋

朝蟬のいやに啼くとき啼かぬとき

そら来たと白雨に掌を差し伸べぬ

アロハ着てはしやぎたくなる気の未だあり

盲蟬ぶつかる音にまどろまず

氷水落ち着くところに落ち着きぬ

蝉時雨だまらっしゃいと夕立来

はらからは屈んですなり芋殻焚

疎開地の機銃掃射の諸畑

二夏を経たる金魚を死なしめき

鼻声に何か言ひたげ朝の蟬

夏草を引きちぎっては歩むなり

厨房へ徹る真夏の広東語

灼け紅旗へんぽん関羽生誕祭

土用波波の裏より手が挙り

浴衣着に一皮むけていい女

水泳の足の切り傷オキシフル

竹煮草雨あたふたと駆け抜けて

ヤブニツケイ大樹自尊の秋立てり

腰折れの扇子使ひてふむふむと

烏瓜の花の縮みて昨日あり

侠客の鮎にしらじら谿明くる  
手花火の音の奇天烈奇天烈と  
不景氣を一蹴せんと揚花火  
漂ふて花火の煙の大海月  
お昼寝の面付き直せ山の神  
秋蟬の遠く蔵書を死蔵して  
何に付けきゅつとやらねば盆最中  
ぶだう食ふ渋ある故の甘味なれ  
秋秋と尾緒を付けて啼く蟬も  
連れ鳴きの末はだらけて法師蟬  
空蟬の貫き通す初一念  
月並みを恐れず恥じず名月吟  
俳諧の奉行何処に豊の秋  
熟柿皆承知年貢の納め時  
横須賀へ舟賃五十銭の秋  
角田武夫「金澤百景」水彩風景画  
社好き瀬戸明神の油蟬  
秋分金澤八景 懐古の木造駅舎の日章旗  
泥亀も首をすぼめて盆休  
世之介の昼寝の涎ぬぐひやれ  
心音も至極尋常明日は秋  
藪つ蚊の金属音の急降下  
急雨にもいけしやあしやあの法師蟬  
あな蟻の門渡り風船葛にも  
白芙蓉後事託すと云ひて墜つ  
颱風の何処へ抜けやうかと腐心  
山出しのししうどの花盛りなり  
夕立のあとのむむつとする中に

わたつみに鳴神墜ちてどっぴんしゃん  
夕立が上り辺りのなまぐさし  
ダリエンス手練手管のピアノの涼  
低音部利かせ夜涼のダリエンス  
幼な子の見て見て見ての草もみぢ  
信貴山縁起絵巻 飛倉巻  
露の鉄鉢長者の倉を持ち上げて  
飛倉は野山の錦一っ跳び  
命蓮の法力使ふ秋天下  
信貴山縁起絵巻 尼公巻  
色変えぬ松をあふぎて尼の旅  
大佛の夢のお告げに粧ふ山  
迷へども持って出かけぬ秋扇  
雀蛤になること容易なこっちやない  
一龍齋貞水  
白浪物短けえ娑婆に昼の虫  
そこそこの梨買うて来て褒めらるる  
二の腕の歴然とあり秋の風  
隼人瓜畑の先を通り雨  
腹話術腹の底より秋の暮  
秋風も紅燈趣味もそれとなく  
衝羽根に鬼籍の人と昼の酒  
こんなのと母が手拵げ穴惑ひ  
虫時雨妻の寝顔のつやつやと  
月渡る空朗々と虫今宵  
根詰めて仕事にかかる虫の夜  
烏瓜咲く辺の興味津々と  
秋雨にひるむどころかあめんぼう  
芙蓉咲く高さは風の通り道  
蜘蛛の囀を払ふことなく庭掃除

ちちろ虫雨の音色と心得て  
弁慶草起こし野分の後始末  
草千里一二三と霧湧いて  
糸瓜忌に出来て俗だが氣に入る句  
口さがなき婆のがちやがちや娘のちゝろ  
蚊の姥に留守を頼んで出かけけり  
一波乱相撲秋場所上位陣  
烏瓜不思議や不思議霞み咲き  
芙蓉の葉食むは一体如何な虫  
長北九州行き夜のつれづれに湯の効能書  
臭かぼす橙採る畑のあなたに周防灘  
鬼やんま青の洞門抜け来たる  
穴惑大日如来につこりす  
ゆふいんに妻と遊べば色鳥来  
芒馳す彼方祖母山傾山  
花すすき夜盗さながら裾野馳せ  
熊本より来たばい真名井の滝はよか  
紅葉狩薩摩おごじよのバスガイド  
相まみえ臭橙の里の大日だい如来にちさん  
昼闌けて鳴く虫もなき岡城趾  
有妻も亦袋類ポシエット族なればおばさん秋の日向路へ  
日田杉のずんと高むや秋の空  
国東の仁王顔してぎんなん食む  
向日葵の百の素顔と阿蘇連山  
日豊線爪先立ちに曼珠沙華  
夜長宿宴席の名も草千里  
ゆふいんの霧に目の慣れ梅擬

鉄漿蜻蛉おはぐろに羽搏ち疲れといふものなし  
ゆふいんの銀鼠ねねずこ雨まみれ  
まんじゆさげその朱ケ飛んで宇佐八幡  
祖母山の裾のコスモス高かばい  
霧込めののっぺらぼうぞ草千里  
カルデラを一目たりとも霧の中  
嘶きと思はるこゑも霧四辺  
熱泥のべっぷべっぷと秋の雨  
稲穂波そぞろ打ち合ふ神楽の里  
秋興の宿のだご汁かつぽ酒